

木村・豊中市議が暴いた森友疑惑隠しを許すな

～安倍首相夫妻の正体とは

◆フリージャーナリスト・吉竹幸則

(元朝日新聞記者、戦争をさせない左京 1000 人委運営委員)

森友疑惑の火付け役である木村真・豊中市議を京都にお招きして、何ゆえの本日の講演会か。木村市議がこの国を覆う黒い雲・改憲推し進める安倍政権とその取り巻きに対し、関西の地からたった一人で闘いを挑み、その実像を暴いた立役者だからです。

「幽霊の正体見たり枯れ尾花」。木村市議が暴いたものを一言で言えば、こういうことでしょう。集団的自衛権行使の危険性を訴え、安保法制成立阻止で国会を取り巻いた一昨年ですら、残念ながら森友疑惑ほどには、安倍政権を追い詰めることは出来ませんでした。

安倍政権という「幽霊」。得体の知れないその取り巻き。声の大きい戦前復古勢力の台頭に人々は恐れ、声を潜める風潮がますます高まっています。しかし、彼ら一人一人バラバラにして見て行けば、何も恐れることはない。その「正体」は「枯れ尾花」だったとことを木村市議は教えてくれたのです。

木村市議が森友疑惑を追及した足跡を辿れば、戦争をしない国造りのために私たちに出来ることがもっとある。憲法九条を守るこれからの運動に大いに参考になることがあると考え、「戦争をさせない左京 1000 人委員会」で講演会を企画しました。

今、北朝鮮情勢の緊迫化も手伝って、政権や安倍取り巻きの政治評論家らによって、森友疑惑の幕引き・矮小化が図られ、それでなくても腰が引けている既成メディアの報道もさらに下火になっています。しかし、それを断じて許してはなりません。

私はこの講演会の企画を提案したのですが、やむを得ない事情で本日参画できなくなりました。そこで森友疑惑の本質と今後の取り組みの在り方について、私なりの考えをこの文書にしたため、皆さんの議論のたたき台にして戴くことにしました。

1、疑惑の本質が明らかになる財務省の枯れ尾花ぶり

森友疑惑については、今ではさんざん報道されているので、ここでは簡単におさらいしておきましょう。

森友学園の籠池泰典理事長(当時)は、憲法改正で安倍政権を後押しする日本会議のメンバーです。彼の取り仕切る系列幼稚園は、園児に教育勅語を暗唱、安保法制を推進する安倍首相応援を唱和させることでも知られていました。その延長上に「日本で初めて唯一の神道の小学校」を造ろうとしたのが、疑惑の発端です。

安倍首相の妻の昭恵氏。一昨年、名誉校長を引き受けた際の講演会で「こちらの教育

方針は大変、主人も素晴らしいと思っている。(卒園後) 公立小学校の教育を受けると、せっかく芯ができたものが揺らいでしまう」と語った映像も明らかになっています。

安倍夫妻が目論むのは、戦前復古の教育方針であることは間違いないでしょう。それを実行する幼稚園がせっかくあるのだから、小学校も作り、皇国史観を植え付けた子供を増やしていきたい…。そのため昭恵氏は寄付集めや小学校認可のための広告塔として名誉校長も引き受け、文部科学省の締め付けと相まって、森友学園をモデルケースにやがて国の教育全体を戦前に戻したいという思惑が見え隠れします。

ただ、森友学園は資金的にはあまりにも脆弱でした。小学校の建設地として籠池氏は、伊丹空港の騒音対策として国が買い上げていた豊中市の国有地8770平方メートルに目をつけました。

2010年、豊中市は国からこの物件のやや大きめの隣地を14億2300万円で購入。12年には別の学校法人がこの物件を「5億8000万円で買いたい」と財務省に申し込んでも、「安すぎる」と断われた経過もあります。

資金不足の籠池氏に、とてもそれを上回る額を出せるわけがありません。最初は借地を申し込み、さらに16年3月、「地下からごみが見つかった」ことを理由に、財務局は鑑定価格9億5600万円から、「ごみ撤去費」8億1900万円を差し引き1億3400万円の随意契約で売却したのです。しかも、籠池氏は国から補助金の支給も受けられますから、実質、国有地売却で国は赤字になった計算です。

この間、首相夫人付きの役人が財務省と昭恵夫人の間を取り持ち、たびたび交渉していたことも明らかになっています。権力者の意向なら財務省が知恵を絞って「特例」を作り、籠池氏が申請書に名前だけ書けば、実質ただで国有地が手に入るよう手を貸したのです。

だから財務省は、国有地売却が国民に知られるのが嫌だったのでしょう。売却価格が非開示にされ、それに疑問を持ち調べ始めたのが木村市議です。

常々、「財政難」を口にし、増税や福祉予算の抑制を提唱しているのが財務省です。ところが権力者の口ききがあれば途端に豹変、国民の財産をないがしろにする「枯れ尾花」だったことが垣間見えました。

ただ、その全体像は、これまでの国会審議を通じてはまだ明らかになっていません。「枯れ尾花」の財務省をこのまま放置すれば、私たちの財産はさらに目減り、将来の世代にツケを残すことになります。全体像の解明は、何としても成し遂げねばなりません。

そのためには、何が必要で私たちはどうすればいいのか。ヒントは、木村市議が疑惑追及の過程で次々明らかにしていった森友疑惑にまつわる組織、人物の「枯れ尾花」ぶりの実像を改めて一つ一つ見つめ直し、検証することにあると思います。以下、「枯れ尾花」の面々を挙げていきたいと思います。

2、安倍夫妻も取り巻き政治評論家も「枯れ尾花」

木村市議の記者会見がきっかけとなり、森友疑惑で野党からの追及が始まった今年2月17日、安倍首相は衆院予算委員会答弁で「妻から先生（籠池理事長）の教育に対する熱意は素晴らしいと聞いている」と語っています。

ところが、安倍氏は籠池氏と政権側との数々の不透明な関係が報じられると一転、同24日の委員会で（籠池氏は）「非常にしつこい」「教育者としていかなものかと相手方に伝えた。何回も断っているにもかかわらず、寄付金集めに名前が使われたのは本当に遺憾で、抗議をした」と、なりふり構わず親密ぶりを否定して見せています。

しかし、森友学園を支援して来たのは昭恵夫人だけだったのでしょうか。日本会議に支援され、憲法改正、復古思想に基づいて政治を進めようとしてきたのは、首相本人ではなかったのでしょうか。むしろ夫唱婦随で森友支援に動いていたとみるのが妥当でしょう。

でも、都合が悪いと見るや、ただただ逃げの一手。妻に責任を押し付ける。これが安倍氏の本質であり、無責任に逃げ回る「枯れ尾花」であることを見せつけてくれました。このような人物は自分の政策が失敗し、この国が戦禍に見舞われることになっても、戦前の指導者層同様に逃げまわるはずで、信念もない無責任な人物を政権の座に長く就かせておいていいのか。それを私たちに改めて考えさせてくれたのも、森友疑惑追及です。

安倍氏取り巻きの政治評論家も「枯れ尾花」だったことも、この森友疑惑報道でよく見えました。彼らは政権内部から耳打ちされるイメージ戦略に基づいてテレビに出て、「昭恵夫人は誰とでも仲良くなり、頼まれればいやと言わない性格」とのイメージを視聴者に植え付けることで、安倍氏本人に責任が及ぶことを避ける役割を担ってきました。

しかし、森友報道以降、かなりの人たちが彼らの「枯れ尾花」ぶりを見抜けるようになってきたようです。彼らはネットで「スシロー」と呼ばれています。森友疑惑はスシローたちが言うような「アキエゲート事件」ではなく、「シンタロウゲート事件」です。

私も政治記者時代、彼ら評論家が回転すし屋よりはるかに高級なすし屋に出入りし、政治家たちと親しげに会食している場面に何度も出くわしました。「スシロー」の顔ぶれは、「湾岸戦争では軍事貢献しない日本が世界から批判された」などと安倍政権と軌を一に、したり顔で安保法制推進論をテレビで語っていた政治評論家とぴったり重なります。

「なんだ、あの『スシロー』たちは、結局政治家たちにすし屋でおごってもらい政権側が言いたいことをテレビで代弁していただけないか」——そんな内幕を誰の目にも分かるように見せつけてくれたのも、木村市議の功績でしょう。

3、既成メディアも「枯れ尾花」

木村市議が不透明な森友学園への国有地払下げについて初めて気付いたのは、昨年春だと聞いています。木村市議が疑惑追及の動きを強めてもメディアが積極的に動くこと

はありませんでした。

私の古巣でもある朝日新聞が今年2月9日大きく取り上げたことで、森友疑惑は朝日のスクープのようにも言われることはあります。しかし、国有地払下げ金額の公表を求めて木村市議が大阪地裁に提訴した翌日であり、すべて木村市議の動きに合わせた客観報道の域を出ません。「権力監視」が使命であるはずでありながら、既成メディアは朝日に限らず、安倍政権に対して腰が引けていたとしか思えません。既成メディアも「枯れ尾花」です。

それが証拠に既成メディアの森友疑惑報道の特徴は、どこも木村市議の調べたことの後付け報道ばかり。記者自身が調べて事実を明らかにしたような大型の特ダネ、調査報道は皆無に等しいと言わざるを得ません。だから、疑惑の本丸である財務省がどのような経過で森友学園にただ同然に国有地を払下げしたのか、政治家の関与はあったのか。交渉経過の文書をはじめ、実態が全く明らかになっていません。

確かに安倍氏から籠池氏が離反してことによって、籠池氏から多くの事実が明るみに出てきました。しかし、残念ながらそのきっかけを作ったのは、既成メディアの記者でなく、それまで籠池氏ら日本会議について、腰を引かずに深く追及して来たフリージャーナリストの菅野完氏でした。籠池氏にとって菅野氏はまさに「昨日の敵は今日の友」だったのでしょう。だから、菅野氏は籠池氏の信頼を得てその懐に飛び込み、多くの証言や証拠を入手出来たのです。

私は朝日で長く調査報道を担当してきました。私は森友のような疑惑をいち早く察知するため、まず木村市議のような人たちとの人脈作りに励みました。疑惑の端緒がつかめれば、疑惑の舞台である役所の中で真相を語ってくれそうな人脈作りに2-3カ月はかけます。役所の中にも必ず、正義漢はいます。周囲に悟られないようにそうした人物にたどり着くことが出来れば、何とか秘密資料も手に入ります。長期間かけての地道な人脈作りが報道の成否を左右します。

世間で大きく疑惑が報道されるようになってから記者がおっとり刀で関係者取材を始めても、周囲を恐れて極秘文書を持ち出してくれるような奇様な役人はいません。何故、森友疑惑で既成メディアの記者がスクープを書けないか。この様な地道な作業をしていないからとしか、私には思えません。

安倍氏と親しくしていた当時の籠池氏は、朝日の従軍慰安婦報道にも批判を強め、系列幼稚園の父兄に対しても、朝日の不買運動に加わるよう、働きかけていました。森友疑惑追及に朝日は当初何故消極的だったのか。私の後輩記者の何人かに聞いてみましたが、彼らは異口同音に「従軍慰安婦報道批判を浴びてから、朝日幹部は、こうした勢力を批判する記事を書くことに腰が引けるようになり、現場にも影響している」と語ってくれました。

しかし、朝日批判をして来た籠池氏らの勢力も、実態を丸裸にすれば、「枯れ尾花」でした。その「枯れ尾花」に恐れる朝日もまた、「枯れ尾花」と言うところになるので

しょう。

ただ、私は既成メディア出身です。「その欲目ではないか」との批判承知で一つだけ言わせて下さい。

確かに朝日に限らず、今の既成メディアは「枯れ尾花」です。しかし、何としても再生してくれないと困るのです。今回の森友問題でも、腰が引けまくっていても、木村市議の記者会見をきっかけに朝日報道が始まり、既成メディアが揃って大きく後追い報道したことで、問題が曲がりなりに解明されつつあります。その結果、神道小学校の出現も国有財産がタダで売られる事態も止まりました。

メディアは腐っても鯛の一面があります。少なくとも、既成メディアの中にも心ある記者はいます。そうした記者を応援することで、メディア全体の健全性を保たせる努力も、私たち市民の側には必要ではないかと思えるのです。

4、国民も「枯れ尾花」か

とは、言うものの北朝鮮情勢が緊迫化する中で、森友疑惑から安保問題へと国民の関心に移りつつあります。そのスキを縫って安倍首相も財務省も、「知らぬ存せず」を貫き、逃げ切りを画策。支持率も少しずつ回復、憲法改正に賛成する人の比率も増えてきている状況を見れば、私には「国民も枯れ尾花か」との思いを持たざるを得ません。

何故なら、森友疑惑でも明らかになった安倍首相の無責任ぶりからして、この緊迫化した時期に安倍政権に命を託すことの危険性を国民は何故気づかないかと、思うからです。

どうして極東でここまで緊張が高まったのか。もう一度、経過をたどると、安倍氏らと考えを共有する皇国史観を持つ「枯れ尾花」たちが導いた結果であるからです。

まず、北朝鮮との関係を振り返ってみましょう。2002年、当時の小泉首相訪朝で「日朝平壤宣言」が署名され、緊張緩和が期待されました。しかし、北朝鮮とのパイプ役だった田中均・外務省アジア大洋州局長に対し、「国交正常化を優先し、拉致被害者問題を軽視した」との批判が、安倍氏の取り巻きグループから強く出ました。その結果、田中氏という得難いパイプ役を失った日本は、拉致問題を解決するどころか、安倍政権下でますます日朝関係が悪化。軍事的緊張がここまで高まっても、日本は米国に追従、米軍の使いパシリをするだけで、事態を打開する外交的手立てを持ってないでいます。

当時、何者かよって田中氏の自宅に爆発物が仕掛けられる事件も起きました。この時、「(売国的行為をしたのだから)当然」と批判したのは、都知事の石原慎太郎氏でした。その石原氏は、尖閣諸島は中国を刺激しないよう「静かななる実効支配が日本の国益」という伝統的な日本の外交方針に異を唱え、それに過剰反応した民主党政権によって国有化されて以来、中国との関係は悪化の一途となりました。石原氏は豊洲市場問題で「私は部下任せにしていた」と責任転嫁発言をして、「枯れ尾花」ぶりを露呈しています。

従軍慰安婦問題も国家間の約束を守れない韓国政府の問題が確かにあります。しかし、

結局は戦争責任を本心では反省しない日本の保守政治家がいる限り、この問題は解決しません。

私は、一昨年の左京フォーラムで「米本土への核攻撃を防衛する米国の基本的軍事戦略は、日本と欧州に米軍基地に置き、米国が届く前にこの基地から相手の戦略拠点をたたくことにある」と話しました。覚えておられる方もおられるでしょう。

まして、今は「アメリカファースト」のトランプ政権です。もし、北朝鮮の核攻撃が本当に米国の脅威になれば、北朝鮮攻撃に踏み切る可能性は否定できません。日本や韓国が北朝鮮の攻撃で取り返しのつかない事態が起きる恐れがあったとしても、です。

その時、日本はと考えると、「極東の中の日本外交」は米国の言いなりでいいとは、とても思えません。極東に位置する日本には、中国、韓国、北朝鮮と共通して話せる歴史観の共有が必要となります。

素直に過去の戦争に反省の言葉を出せないのは、安倍氏、籠池氏、石原氏にも共通し、「日本会議」に代表される皇国史観にある人たちです。木村市議が暴いた森友疑惑とは、皇国史観を持ち、極東での日本の平和外交を阻んでいるこの様な人たちは、どんなにもっともらしい言葉を吐いても所詮「枯れ尾花」に過ぎなかったことを明らかにしたことです。

日本は枯れ尾花の安倍政権に極東戦略を任せ、米軍と一緒に集団的自衛権をいくら行使しても、極東諸国の軍事的脅威から逃れられることは未来永劫ないでしょう。万一、米軍との共同行動で日本が他国から攻撃を受け、国土が焦土と化しても、彼らは責任のなすり合いに終始するでしょう。

なら、北朝鮮との緊張が高まっているからと言って、この時期、森友疑惑の追及をないがしろにして安倍政権に任せていいという結論には到底なり得ません。むしろ、森友疑惑から浮かんだ安倍氏取り巻きの無責任な「枯れ尾花」ぶりを改めて検証することで、日本と極東諸国の共存のためには、どんな政策、どんな政権が必要かを考える時期ではないでしょうか。